

持主不明くあたしとかことく

登場人物

あたし

かこ

蜘蛛

猫

草

あたし 「悪夢があたしをたべつくす。

全部食べきる寸前で今のあたしは生きている。

かろうじて。今日を生きているんだらうな。」

舞台上にはピアノが一つ。そして三つの椅子が用意されている。

ここは、あたしの部屋。

どこかヨーロッパあたりだろうか。古きを愛する都会の一室である。

小さなテーブルの上に鏡。観葉植物。奥には窓。

明転

蜘蛛・猫・草が登場する。それぞれ黒・ピンク・黄緑の本を持っている。

ゆっくりと始まるかこからの手紙。

かこ 「私じゃない、その誰かへ

この部屋は寒いです。あなたのその部屋も寒いですか。小さな箱の中で、私は一人です。

ゆっくりと日が暮れてきました。こんな詩のような毎日が、ずっと続くはずがありません。

私は今、一人です。この中にはたくさんの方の連絡先が入っているはずなのに、誰の名前も思い出せずにいます。

実際、私と会ったところで、あなたは私のことを思い出せないのでしよう。それと同じで、私もあなたを思い出せずにいます。

カーテンは土色。絶対に光は差し込まない。もしも勇気があるのなら、私はもう一度別の人生をやり直すでしよう。そしてその勇気とやらは、たぶんおそらく、私の中に眠っているのです。そして、たぶんおそらく、もうあと少しで、その勇気とやらを突き動かす火山のような衝動が私を襲うことでしょう。

小さな小さな箱の中。私は今、この中にいます。魂だけが浮遊して、どこかへ飛んでゆくのです。」

かこからの手紙は支離滅裂で、安定した精神状態で書いたものとは思えなかった。

かこからの手紙の途中で、歌い手が登場。ピアノにつく。

♪始まりのうた♪

さて、物語を始めましょう。

皆様、劇場へようこそ。

この世にもしほはないけれど、

ここでは起こりうるそんな世界。

劇場へようこそ。今ここから始まりのうた。

この世にもしほはないけれど、

ここでは起こりうるそんな世界。

あたしは会ったことがないけれど、

この中では会えるかも知れない。そんな世界。

今のあなたに会えてよかった。

今ここから、始まりのうた。

あたし、歯磨きをしながら登場する。寝起きである。

劇場奥のトイレに入り、口をゆすいで舞台へ戻ってくる。

あたし、ゆっくりと身支度をします。鏡の中の、見慣れた自分の顔を見る。

あたし 「・・・あ、白髪・・・。」

♪がーん♪

あたし、鏡をみつめ、丁寧に一本だけ白髪を抜く。

あたし 「ぶちん。」

あたし、ため息。そして、化粧を始める。眉毛かまつげを整えているとき、鏡に一匹の蜘蛛が横切る。

あたし 「きゃーーーーー!!!」

蜘蛛 「きゃーーーーー!!!」

あたし 「わ、わ、わ。」

蜘蛛 「なに、なに、なに。」

あたし 「く…も…?」

蜘蛛 「はい。蜘蛛と申します。」

あたし 「やだあ。」

蜘蛛 「なんでえ。」

あたし 「どうしよう。」

蜘蛛 「ちよっと、どうする気ですか?」

蜘蛛 「やめてよ?」

蜘蛛 「まさかね…。」

大きくこぶしを振り上げるあたし

蜘蛛 「わーーーーー!!!うわーーーーー!!!人殺しーーーーー!!!蜘蛛殺しーーーーー!!!」

あたし、こぶしをおろして

あたし 「…だめだ。」

蜘蛛 「え。」

母(声) 「朝蜘蛛は来客のしるし。殺したらいけないよ。」

あたし 「くそう。お母さん、要らないうんちくばっかり教えて。」

蜘蛛 「うんちくではないと思います。でも良かったです。あなたが、その、お母さんの言葉を思い出してくれて。朝蜘蛛でも何蜘蛛でも殺生はいけません。本

当に、危うく、朝のお散歩中の何の罪もない僕に不幸が訪れるところでした。」

あたし 「はあーあ。」

化粧が済み、ことのついでのように観葉植物に水をやるあたし。

水をやった後、立ち去ろうとするが、もう一度観葉植物のところに戻って

あたし 「ん？…げ。」

草 「やだ。何？」

あたし 「わ、何よこれ。なんでこんな色に、なるの？」

草 「失礼な。それはあなたが、気が向いたときにしかお水をくれないからでしょう。私は観葉植物。いきなり寒いお外に出されたり、いきなり乾燥…いった
—————い!!!」

あたし、黄色くなった葉をちぎった。

草 「わ、わ、何するの何するの。」

あたし 「これでよしっと。」

草 「よしじゃない、よしじゃない。全然よしじゃない。」

猫 「人間は臆病だね。なんでも自分たちでやりたがるくせに、肝心なところでしらんぷりをする。」

あたし 「なに？」

猫 「あらやだ。聞こえちゃった。」

あたし 「ん？」

猫 「しーっ。」

あたし 「…。やだなあ。最近、なんかいるような気がする。」

猫 「あーこれ。」

蜘蛛 「そろそろ。」

草 「聞こえるわ。」

♪

あたし 「暇だな…。今日は休みだつてのに、何の用事もない。外はこんなにいい天気なのに、ここにいると身体が腐りそう。」

猫 「腐れ腐れ。死にやしない。」

あたし 「あ！」

猫 「おっと失礼。」

あたし、窓のむこうに猫を見つける。

あたし 「可愛い猫ちゃん！」

猫 「やめて、その呼び名。」

あたし 「ミルク、飲む？」

猫 「やだね、半年も期限が切れたミルク、誰が飲むもんですか。」

あたし 「あ、そう。いらないの。」

あたし 「猫のくせに。」

猫 「えー。そうくる？そうくる？」

あたし 「ちよūdō良かったのに。はーあ。」

どぼどぼとミルクをすてるあたし。

あたし 「よいしょー。」

あたし 「一つ、おいしいもの。一つ、かわいいもの。一つ、楽しいこと。」

「ないんだよな。なかなか。結局この中にあるのは、一つ、汚いもの。一つ、面倒なこと。一つ、不安なこと。」
「こうやって日が昇って。また、その日が沈んで。あたしの中の何かを剥いでいって。これっぽっちも楽しくなくて。」

「あたしは毎日、だれと会話をしているんだろう。」

「こんな狭い部屋の中で、誰にでもかけるようなものをかいて。」

ばらばらと紙をめくるあたし。

その紙自体は白紙だが、文字か絵を見つめているようである。

画家なのか作家なのか。“誰にでもかけるようなもの”とは何なのか。

あたし 「…ん。…んんん。」

部屋の隅に何かがあるのを見つける

あたし 「これ、なにこれ。なにここ。なんだ、これ。」

あたし、一通の手紙をみつける。

あたし 「なにこれ・・・。」

♪かこからの手紙♪

私じゃない、その誰かへ

この部屋は寒いです。あなたのその部屋も寒いですか。

小さな箱の中で、私は一人です。

ゆっくりと日が暮れてきました。こんな詩のような毎日が、ずっと続くはずがありません。

私は今、一人です。

この中にはたくさんの方の連絡先が入っているはずなのに、誰の名前も思い出せずにいます。

実際、私と会ったところで、あなたは私のことを思い出せないでしょう。

それと同じで、私もあなたを思い出せずにいます。

カーテンは土色。絶対に光は差し込まない。

もしも勇気があるのなら、私はもう一度別の人生をやり直すでしょう。そしてその勇気とやらは、たぶんおそらく、私の中に眠っているのです。そして、たぶんおそらく、もうあと少しで、その勇気とやらを突き動かす火山のような衝動が私を襲うことでしょう。小さな小さな箱の中。私は今、この中にいます。魂だけが浮遊して、どこかへ飛んでゆくのです。

あたし 「私じゃない、その誰かへ。」

あたし 「…ねえ、ちよっと。」

猫 「はい。」

あたし 「そこで、コソコソやってないで。」

猫 「やっていませんけど。」

あたし 「出てきなさいよ。」

猫 「にやおーん。」

あたし 「あ、猫ちゃん…。」

あたし 「あなた、だったの。」

猫 「何が。」

あたし 「いやだ、喋った。」

猫 「いやだ？何がいやだ。」

あたし 「あなたは喋る猫？」

猫 「不思議の国じゃあるまいし。」

あたし 「…。」

猫 「まあ、喋ることにしましょうよ。劇場の中では猫も喋る。」

蜘蛛 「蜘蛛もしゃべる。」

草 「草もしゃべる。」

猫 「ようこそ、夜の劇場へ。」

あたし 「…。」

猫 「みつけたんでしょ。手紙。」

あたし 「…うん。」

猫 「それはね、かこからの手紙。」

あたし 「過去。誰の過去。」

猫 「書いてあったろ、そこに。」

あたし 「どこに。」

猫 「ま、まだ分かんないか。まだ始まったばかりだものね。」

あたし 「…。」

猫 「あ、そうそう、ちゃんと謝っておいた方がいいよ。」

あたし 「え？」

猫 「あの人たちに。」

あたし 「人？」

猫 「さっき、蜘蛛を殺そうとしたでしょ。あと、草をちぎったでしょ。」

あたし 「ああ…人…？」

猫 「ああもう！劇場の中では草も人。後でわかる。ちゃんと分かるから。」

あたし 観葉植物に近づき

あたし 「…ごめんなさい。」

草 「いいのよ。許していないけど。」

あたし 「うわぁ。」

猫 「劇場の中では草も喋る。」

あたし 「…痛かった？」

草 「とっってもね。」

あたし 「ごめんね。」

草 「気にしてないわ。許さないけど。」

猫 「ご立腹のようだね。」

あたし 「悪いことしちゃったな。」

猫 「あと、あいつ。もう一人腹を立てているのがいるよ。」

あたし 「…蜘蛛？」

猫 「そうそう。」

あたし 「でも、どこに…。」

猫 「さっきと同じ場所にいるよ。よく見てごらん。鏡と壁の隙間。きらっと光るのが見えない？」

あたし、壁に顔を近づけ

あたし 「…あつ。」

あたし 「え、これ、蜘蛛？」

猫 「綺麗でしょう。」

蜘蛛 「ようやくお分かりで。」

あたし 「あ、喋った。」

猫 「だから、劇場の中では蜘蛛も…って何回言わせるの。」

あたし 「え、ちよつと、こつちまで出てきて。」

蜘蛛 「なんですか。さっきは殺そうとしていたくせに。」

あたし 「ごめん、ごめん。でも、なにこれ…。とつても、綺麗。」

蜘蛛 「ちよつと奥まで入りすぎちゃったからなあ。ちよつと待ってね。」

あたし 「……ああ！！」

蜘蛛 「なに？なに？なに？！」

猫 「どうした。どうした？」

草 「騒がないでよ、騒々しい。」

あたし 「脚が！！綺麗な脚が！！」

蜘蛛 「ああ、抜けた？」

あたし 「ごめんなさい！あたしが出て来いって言ったからだ…。それに、そもそも、そちらに追いやったのもあたしだ。」

蜘蛛 「そんな、そんな。気にしなさんな。」

草 「人のことちぎっておいてよく言うわよ。」

あたし 「でも…蜘蛛の脚ってこんなに綺麗だったんだ…。知らなかった。」

蜘蛛 「まだあと「色ありますから。大丈夫。」

あたし 「歩きにくくない？」

蜘蛛 「そりゃあね、でもいつかは抜けるから。」

あたし 「もったいないなあ…。抜けた脚、どこかにあるかな。」

抜け落ちた脚を探そうとするあたし

猫 「やめなさい！！！！！」

草 「あんた、正気？」

あたし 「どうしてよー。もったいないよ。」

猫 「もったいない？」

あたし 「こんなに、キラキラ光ってるんだよ。どうにかしたら、くつつくかも。」

猫 「くつつける？抜けた、脚を、もう一度？」

草 「きやあああ…！」

猫 「正気の沙汰とは思えないね。」

蜘蛛 「なんともおぞましい。」

あたし 「なによ、そんなに言わなくても…。」

猫 「やっぺんだよ。あんたらは、それだけのことを。」

あたし 「…じゃあ、もういい。」

蜘蛛 「…にしても、何て騒々しい日だ。」

あたし 「あれ…なんか、こんなに喋ったのって久しぶりだな。」

草 「へえ。あんた、友達いないの。」

あたし 「え。」

草 「友達。」

あたし 「うーん。多い方ではないかも。というか、とても少ない。」

猫 「重症だね、これは。」

♪

音が鳴り出す

蜘蛛 「しっ。」

猫 「おっと、失礼。」

あたし 「へ？」

蜘蛛 「すまして耳を。」

あかし 「耳？」

草 「あんた、馬鹿。聴こえないの？」

♪友達、イナイ♪

イナイ、イナイ、トモダチ、イナイ。

トナリ、トナリ、ダレモイナイ

ピアノの下にもぐって眠る

そうさ、この子しかもういない

カップケーキとコーヒート

同じ組み合わせにはもう飽きた

イナイ、イナイ、トモダチ、イナイ。

トナリ、トナリ、ダレモイナイ

あかし 「なにこれ、気持ちわるい。」

蜘蛛 「かーこ。」

あかし 「かこ…この手紙。」

猫 「そう、その手紙。」

草 「ずっと聞こえていたわよ。あんたがここに来る前から。」

あかし 「ここに、来る前？」

「ここに？」

「ここって？」

「この…ここのこと？この…部屋？」

あかし 「…あ」

あかし、奥から郵便物(小包)を持ってくる

あかし 「そうだ、これ。思い出した。」

あたし 「なんかさ、いつだったかな、だいぶ前、何かよく分からない人宛の郵便物がうちに届いていて…でも住所はうちなんだよねえ。もうここに住んでずいぶ
んたつのに…」

猫 「賃貸でしょ、ここ。」

あたし 「うん。」

蜘蛛 「住人の移り変わりも激しい。」

猫 「この街にはそんな部屋がたくさんある。」

草 「そんなに、珍しいことじゃない。」

あたし 「まあ、そうなんだろうけど。」

草 「この部屋が誰の持ち物かなんてあやふやなもんさ。」

蜘蛛 「あなたの前は、他の誰かのものだったんだ。」

あたし 「確かに…」

あたし 「でも、薄気味悪いんだよね。この住所、確かにあたしの住所なのに、なんか、ここ、ここだけ、別の誰かの名前でさ。」

蜘蛛 「確かに、あたしの住所、か。」

草 「別の誰かの名前ね。」

あたし 「ずっと忘れてた。」

猫 「ふうん。で、今になって思い出したってわけか。」

あたし 「うん。…ねえ、喋る猫さん。あなたはいつからここにいるの。」

猫 「私？私が生まれたのはちょうど15年とひと月前。とっても寒い日だった。」

あたし 「ここで？」

猫 「生まれたの。そのあたりの、どこかの隙間でね。」

あたし 「そうなんだ。」

あたし 「この荷物が届かなくてこの人、困ってないかな。」

蜘蛛 「さあねえ、届けてあげたらいいじゃない。」

あたし 「え。」

あたし 「どうやって。」

猫 「そんなの、しゃべる猫には分からない。」

あたし 「えー。」

蜘蛛 「でも、案外簡単な方法だったりしてね。」

あたし 「そうかなあ。」

蜘蛛 「しゃべる蜘蛛にも分からないけどね。」

あたし 「でも、なんだかワクワクする。こんなの久しぶりだ。」

猫 「忘れていたんじゃないのかよ。」

あたし 「そうなんだけど。思い出したらワクワクしてきた。なんだかソワソワする。そうか、今日はこのために休みなんだ！」

♪久しぶり♪

久しぶりにここまできました

こんな日は久しぶり

空が赤いなんて久しぶり

私は寂しい子だったから

久しぶりにうちを出てみたら

四角いお空が広がっていた

四角いお空には終わりがあって

そんなこと、うまれたときから知っていて

それでも、走らずにはいられなかった

空が赤いなんて久しぶりだったから

私は寂しい子だったから

もうすぐ会える 会える 会える

あたし 「あたしの中で何かがはじけた。」

あたし、小包を持って

あたし 「かこ…。」

あたし 「かこ…。きつと、あたしの前にここに住んでいた子だ！」

「あたしは確信していた。きっと、この、かこという子は、あたしと同じくらいの年齢で、あたしと考えも良く似ている。きっと、あたしと話が合う。きっと、あたしは、彼女のいい友達になれる。そして彼女もまた、きっとあたしの友達になってくれる。」

こんな、都会のこんなにあくさんある建物の中から、この一部屋を選んで暮らしていたんだもの。そして、その後にあたしがこのを選んだんだもの。かこもこの景色を見ていたのかな。そしてかこも、この空に自分を映していたのかな。ああ、かこと話をしてみたい。

…かこと言う名前からきつと女なんだろうと言うことくらいしか分からないけれど、あたしは確信していた。きっと、この子とあたしは運命でつながっている。こんなに晴れやかな休日には久しぶりだ！休日にやることがあるなんて！思いを巡らすことがあるなんて」

猫 「かこはね、音を作っていた。」

あたし 「へえ、あたしと似てる。」

蜘蛛 「かこは、毎日同じものを食べていた。」

あたし 「何を。」

草 「フルーツののっていないカップケーキとブラックのコーヒー。」

猫 「ほら、見てごらん、あそこ。ここから見えるあの角。」

あたし 「クリーニング屋さん。」

猫 「昔はカフェテリアだったんだ。」

あたし 「へえ。」

草 「小さな亭主が一人でやっていた。」

猫 「かこはいつもそこで、同じものを食べていた。」

草 「亭主が死んで、そこも無くなった。」

あたし 「跡形もない。」

蜘蛛 「そんなもの、なかったかのようにね。」

草 「まるで、ずっとクリーニング屋だったかのような。」

あたし 「行ってみたいな。」

猫 「無理だね。」

草 「何を言い出すのかと思ったら。」

蜘蛛 「冗談も休み休みに言ったほうがいい。」

あたし 「なによ、さっきから、あたしの言うことを全否定して。」

猫 「もうないのさ、あのカフェテリアは、この世には。」

蜘蛛 「亭主もいない。」

猫 「優しかったな、あの小さな亭主。時々あまった食べ物をくれた。」

草 「暑い日には水をくれた。」

あたし 「みんなも思い出ししてるじゃん。」

蜘蛛 「違うんだな。」

草 「あんたのは思い出しじゃない。」

あたし 「え。」

猫 「もう、会えないんだよ。絶対に。この世にないんだから。だからそれをほじくり返したって意味がない。」

草 「小さな亭主はひっそりと店をたたんだ。」

蜘蛛 「誰にも気づかれぬように。」

猫 「実際ほとんどの人が気付かなかった。」

草 「すぐに記憶は塗りつぶされて」

猫 「あそこに、カフェテリアがあったことすら、不確かなこととなった。」

あたし 「…かこ。…そうだよ、かこは気がついていたはずだよ。その、カフェが無くなったことに。いつもそこでコーヒーを飲んでいたんでしょ？」

草 「聞いてみたらいいじゃない。かこに、直接。」

あたし 「え。」

猫 「聞こえているんだろう。さっきから。」

あたし 「…ピアノ…。」

蜘蛛 「耳をすませて。」

猫 「耳だけじゃだめだ。目を閉じて。知らないものばかりを見るからね。人間は。」

草 「本物だけを聞き分けるの。」

蜘蛛 「知らないものを排除するんだ。」

あたし、目をつぶって、耳をすませる。

♪小さな亭主♪

小さな亭主が店をたたんだとき

私ももう引きどきだと思った。

もしかしたらでやり繰り返していた人生は

もうこれまでだとはっきり悟った。

季節はめぐり、人は老いる

私は老いを愛することは出来ない。

小さな亭主は何も聞かなかった。

小さな亭主は何も言わなかった。

カップケーキとコーヒーにはもう飽きた。

私は繰り返してはいなかった

確実に年を重ねて、いつしかここは音だけになった。

私は老いを愛することが出来なかった。

小さな亭主はやっと店をたたんでくれた。

私はうれしかったのかも知れない。

あたし 「…見える。かこが見える。」

あたし 「あたしと…よく似ている。」

あたし 「聞こえる…ずっと、何かを弾いている。………ピアノだ」

あたし 「あたしがここにかいているように、かこも音を生み出していた。ねえ、かこ、教えて、あたしたちはどこへ行くんだろう。」

あなたのその胸の中にあるつかえは、きっとあたしの胸の中にあるものと似ている。きっと、そっくり。いいえ、もしかしたら全く同じものなのかもしれない。あたしは老いが怖い。人と出会うのが怖い。朝日が怖い。

空は永遠ではなくて、きっと終わりがくる。地平線がつながっているなんて嘘。そうでしょ、かこ。返事をして。」

あたし 「…やっぱり…。」

猫 「聞こえたようだね。」

あたし 「うん。」

草 「いいトモダチが出来たんじゃない。」

あたし 「うん。」

猫 「こんな風に、会話が出来るなんて、知らなかった。」

あたし 「知らないのは人間だけさ。」

あたし 「かこはどこにいるの。」

蜘蛛 「どこって、ここにいたさ。」

あたし 「でも、今はあたしが住んでいるじゃない。」

草 「まだ、そんなことを気にするの。」

猫 「その概念を早く捨てたほうがいい。面と向かって話すことだけが、会話なんじゃない。」

あたし 「…何かが、生まれそう。」

ペンをとるあたし。

何かをかくあたし。

紙に、壁に、床に、窓に

あたし 「とにかく、かくことで、かこと繋がることのできる気がした。面白いくらいどんどんアイディアがうまれた。休みだつていうのに、たくさんかいてしまった。もともとあたしの仕事には、これと言った休みはなくて、家で出来る仕事だから。だからあたしが決めた、今日は休みという日は絶対に何があつてもペンを取らないと決めていた。だからこうやって休日にペンを走らせているなんて、ほとんどありえない出来事だった。でも、かかすにはいられなかった。そうだと本来あたしは、誰かに依頼をされて適当なものをかき、送るのではなく、自分のアイディアを形にすることがしたかったのだ。そんなことすら、あたしは忘れていた。思い出すことさえしなかった。」

猫 「おーい。日が暮れるぞ。」

あたし 「止まっている暇なんてなかった。次々に想いが浮かんで、消えた。」

草 「綺麗な夕焼け。」

あたし 「昨日と同じ夕焼けを確認している暇なんてなかった。かこは、あたしに大事なことを教えてくれた。」

蜘蛛 「沈んじゃうよー。」

あたし 「きつと、かこも、今、どこかで音を生み出しているに違いなかった。あたしの中の直感がそう言っていた。間違いない。かこは今、ピアノを弾いている！」

♪音♪

あたし 「かこ」

あたし 「かこに会いたい」

猫 「だから教えたじゃないか、会いに行き方を。」

あたし 「だって、本当には会っていない。」

蜘蛛 「まだ言うか。」

草 「そんなに、顔を付き合わせることをお望み？」

あかし 「今ならどこにだって行けちゃう気がする。」

猫 「人間はそうやって。」

あかし 「貯金を全部つかってもいい。かこにあいたい。」

蜘蛛 「ちよっと落ち着いて。」

あかし 「落ち着く？」

猫 「そう、ちよっと話を聞いて。」

草 「あのね、私たちのことを考えたことがある。あなたがもし、草だったら。私たちはね、絶対に行けやしないの。」

蜘蛛 「電車に乗ったり、海を渡ったり。」

草 「あんたたちはいつも、踏みつけて、汚して、ものすごいスピードで。」

あかし 「何が言いたいの。」

猫 「私達はね、自分の行動範囲が決まっているんだ。」

草 「私なんて、年間で数センチ単位。」

蜘蛛 「自分の行動範囲以外のところへは、絶対に行けない。」

猫 「電車にも飛行機にも乗れない。」

草 「だから、ああやって会いに行くの。」

あかし 「ああやって。」

猫 「あんたもさっきやってたろ。」

蜘蛛 「目をつぶって。」

草 「要らない情報を排除するのよ。」

あかし 「…聞こえるし、見えてくる。」

猫 「それ以上の何が欲しい。」

あかし 「…。あかしたち、きつと、いいトモダチになれる。」

猫 「ああ、そうだと思うよ。」

あかし 「…優しいね。」

蜘蛛 「おや、夜も更けてきた。」

あかし 「もうこんな時間？」

あかし 「いやだなあ。また、年をとるよ。」

♪お誕生日♪

あなたに会えてよかった

私はずっとトンネルの中だったから

水のように流されて

気がついたらあなたの中にいた

狭いでしょう私の部屋は

あなたの方が使い方が上手ね

もう少し話してたいけれど

あなたも私も仕事があるでしょう

そう私達は似たもの同士

そうね、仕事なんておいておきましょう

気の向くままに音を奏でるから

あなたも目一杯かいていてね

私達のお祝いは少し変わっているわね

何回目かの20歳よ、おめでとう。

私たちは永遠に自由

だってそうでしょう20歳。まだまだ人生は長いわ。

あなたに会えてよかった

私はずっとトンネルの中だったから

水のように流されて

気がついたらあなたの中にいた

かこ 「おめでとう。」

あたし 「ありがとう。」

「悪くないな。こんな誕生日も。」

カップケーキとコーヒーを持ったあたし

あたし 「うん。やっぱり今でもコーヒーは飲めないや。かこは10代の頃からずっとコーヒーだって言っていたな。それもブラックの。」

「こうやって、人と話をする方法を、あたしは今まで全く気がつかなかった。便利な世の中だから、すぐに電話も、メールも、会いに行くことだってできた。テレビの中のスキャンダルも歴史上の人物にだって、インターネットを通してすぐに調べることができた。」

…もう何日も電話にでていない。パソコンも開いていない。きっと、あの中にはたくさんの仕事に関する用件やメッセージが溜まっているに違いない。それでもあたしは、なんとなく、怖くはなかった。どうしてだろう。かこに会いにいくと、かこはいつでもあたしを肯定してくれたからだ。もう少しだけ、こうやってぼんやり生きてみたい。」

♪びんぼーん♪

あたし 「チャイムが鳴り、あたしは一気に現実に戻された。そうだ、今日はおそらく月曜日。曜日という概念がまだあたしには残っていた。月曜日、編集者が原稿を取りに来る日だ。」

編集者 「すみませーん。」

あたし 「はい。」

編集者 「かけましたー？」

あたし 「あの、いや、ちょっと。」

編集者 「困るんですよ。そろそろあげてもらわないと。僕もね、立場ってやつがあるんです。編集長ね、あの、デブ。待てないんですよ。待つことができない人。どなるんですよ。僕が原稿を持って帰らないと。だから、ね、困るんです。かいてもらわないと。」

あたし 「あ、はい。ごめんなさい。」

編集者 「ごめんなさいはいいから。かいてくださいね、早く。」

あたし 「努力は、してみます。」

編集者 「あ、あとね、連載なんですけど、再来月で打ち切りが決まったんで。」

あたし 「え。」

編集者 「だから、打ち切り。」

あたし 「打ち切り。」

編集者 「そんな、大したことじゃないでしょ。このご時勢だし。よくあることですよ。」

あたし 「打ち切り。」

編集者 「はいはい、何度も繰り返し返していただかなくても結構です。打ち切りです。再来月。」

あたし 「その次は。」

編集者 「もう、ありませーん。他にもあるでしょ。小さな仕事。あ、いや、仕事に小さな大きなもないんだけど。いろいろやってらっしゃるじゃないですか。

あたし えーっと、デイリー音楽だっけ？ほら、星占いの？星座と音楽の？あれ、ヨガの？ダイエット企画？あれ、なんだっけ。」

編集者 「もう、いいです。」

編集者 「え。」

あたし 「もう、いいんです。」

編集者 「なにが。だから早くあげてもらわないと。取り敢えず、今月の分と…あと出来たらついでに来月の分もただけちやったりなんかしちゃったら。」

あたし 「ありません。」

編集者 「は？」

あたし 「お宅の会社にお渡しするものではありませんと言っているんです。」

編集者 「何を…。なら、連載に穴をあけるつもりですか。」

あたし 「打ち切りなんですよ。どうせ。打ち切りなんですよねえ。だったら書けばいいじゃないですか。“作者の都合で”って。続きはありません。って。」

編集者 「あんた、それでもプロか。いいですか、あなたの作品を楽しみにしているファンの気持ちも考えたらどうです。」

あたし 「いないでしょう。もう、そんな人…とつくに。」

編集者 「…。」

あたし 「お帰りください。」

編集者 「は。」

あたし 「帰ってください。」

編集者 「でも…。」

あたし 「帰って…。」

編集者、席に着く

あたし 「ねえ、しゃべる猫さん。」

猫 「…。」

あたし 「いるんですよ。そこに。」

猫 「…。」

あたし 「15年とひと月を生きてきてさあ、何が楽しかった。何がつらかった。何を感じて、どうしていつまでもここにいるの。」

猫 「楽しかったよ。とっても。色んな人に会いに行った。そして、自分が世界の一部になれた。」

あたし 「世界の、一部。」

猫 「あんたも、それからかこも、あんたのトモダチの、もうとつくの昔から、この世界の一部分なのさ。この世に生を受けた、その日から、ね。」

あたし 「世界の…。」

猫 「世界の一部分には終わりが来る。それは突然かもしれないし、徐々に、なのかも知れない。だけど、みーんな気が付いているんだ。」

猫、立ち上がり、席を立つ。

あたし 「みんな、気がついてる。気がつく…。」

「あたしは…仕事でうちに来た彼にお茶も出さずに、一方的に追い返してしまった。そして大切な仕事をひとつ失ってしまった。」

蜘蛛 「見逃したでしょ、綺麗な夕焼け。」

あたし 「いつの。」

蜘蛛 「昨日も、おとといも。」

あたし 「うん。」

あたし 「…あ「脚」」

蜘蛛 「はい、この間からまた心本抜けました。」

あたし 「どこかに落ちてるかな。」

蜘蛛 「さあ、もう必要が無くなったから抜け落ちたんです。」

あたし 「そうか。」

「綺麗だったのにな。」

蜘蛛 「まだ、赤も青も、緑も黄色も橙も残っていますから。」

あたし 「…本当に綺麗…。」

蜘蛛 「そうですか。」

あたし 「あたし、蜘蛛、殺そうとしたよね。」

蜘蛛 「しましたね。」

あたし 「あの時、脚のことなんか見てなかった。」

蜘蛛 「あんたは私の脚ばかりを強調するけれど。」

あたし 「だって。」

蜘蛛 「いつか私がいなくなったら、何を思い出す。」

あたし 「やっぱり綺麗な脚のことかな。」

蜘蛛 「それじゃあ、寂しい。」

あたし 「そうか。」

蜘蛛 「この脚は、そのうち抜けるよ。全部。」

あたし 「そうなの。」

蜘蛛 「全部抜けたら、やっとこの胴体の美しさに気がつくだろう。私はそちらに早く気がついて欲しい。」

あたし 「うん。」

蜘蛛 「見逃さないでね。」

あたし 「もったいないなあ。」

蜘蛛 「まだ、言うか。」

♪ 蜘蛛 ♪

その蜘蛛は虹色の脚を持っていた

蜘蛛の脚は∞本で、最初に抜け落ちた脚の色は知らない

その蜘蛛は虹色の脚を持っていた

まるで誰かに色を塗られたかのように、その脚は鮮やかな色をしていた

「本ずつ確実に抜け落ちていく脚

全てが抜け落ちたとき、蜘蛛はビー玉になる

唸るほど美しい漆黒のビー玉

ビー玉は転がる 床の上

転がっているのか

いや、下っているのだ

下っているのか

いや、落ちているのだ

ゆっくり、ゆっくりとしかし確実に

私達は落ちていつている

少しずつ少しずつ

昨日より今日、今日より明日

私達は少しずつ

死に向かって生きている

あたし 「蜘蛛はカラフルな、本当に綺麗な脚を持っていたけれど、その一つ一つが剥がれ落ちていくことを、何も恥じてはいなかった。すぼりすぼりと抜けていく感覚を、まるで楽しむかのように、全く痛がりもしなかった。…あたしは…白髪を一本見つけただけでうるたえ、一つのシミが出来たことでせつなくなる。全ての脚が抜け落ちた蜘蛛は、未だに生命力を持ち、コロコロとビー玉のように転がっている。

この世はどの面もきつと坂になっていて、その日までずっと、転がり続けるそうさ。

…その日。」

蜘蛛 「…その日。コロコロ転がって、自分の身体が磨り減って、やがて消えてなくなるその日まで。」

草、黙って席を立つ

蜘蛛 「見逃しちゃった？」

あたし 「もう見飽きた。」

蜘蛛 「見飽きるほどまだ何も見ていない。」

あたし 「夕焼けは、まぶしすぎる。」

蜘蛛 「ほら、最後の一枚が今席を立った。」

あたし 「一枚？」

蜘蛛 「最後の葉っぱだよ。」

あたし 「…あ！」

蜘蛛 「見逃しちゃったようだ。」

あたし 「どうして、ちゃんとお水をあげていたのに。」

蜘蛛 「あんたのせいじゃないよ。」

あたし 「お別れの挨拶、出来なかった。」

蜘蛛 「そんなもの、誰も望んでやいない。」

あたし 「悲しい。」

蜘蛛 「時期が来たただけ。」

蜘蛛 「ほら、あいつも、もういないよ。」
あたし 「え。」

あたし、猫を探す。
いない。

蜘蛛 「みんな、分かっているんだ。」

蜘蛛 「だから、いちいち、挨拶なんてしない。」

蜘蛛 「死期を悟ったら、ゆっくりと自ら姿を消すんだ。」

あたし、目をつぶる

あたし 「会える。」

蜘蛛 「そうだね。」

あたし 「見えるよ。蜘蛛の脚も。」

蜘蛛 「あはは。」

あたし 「みんな…普通だ。」

蜘蛛 「いたって普通さ。いつも通りだ。」

あたし、何かを思い出し、目を開く

あたし 「かこ…。」

蜘蛛 「かこは、この世にはいない。」

あたし 「…。」

蜘蛛 「かこには、会えない。」

あたし 「…。」

蜘蛛 「そもそも、会っていない。」

あたし 「言わないで…。」

蜘蛛 「あんたが作ったんだ…。」

蜘蛛 「カップケーキとコーヒー。頼んでいたのは、あんただろ。」
蜘蛛 「毎日あのカフェテリアで、毎日、悩んでいた。かこのことを思って。…辛かったね。」

あたし 「…そのうちお腹も膨らんでくる。そうしたら音楽も出来なくなる。」
「あたしは…どうしたらいいのかわからない。誰にも相談できない。」

「こんなときに、仕事は順調だった。次々と話ってきた。あたしは体調を省みず仕事に没頭した。
毎日音にまみれていることで、あたしは自分を守っていたつもりだった。あたしは、自分に正直でいたつもりだった。」

「…売れたら売れるほど、あることないこと書き立てられた。天才という文字が書面を騒がせた。あたしは…文字が嫌いになった。家にあった書物という書物の一つ残らず破った。それでも記事は追いかけてくる。あたしは一心不乱にただ弾き続け、歌い続けた。」

♪かこからの手紙♪

私じゃない、その誰かへ

この部屋は寒いです。あなたのその部屋も寒いですか。

小さな箱の中で、私は一人です。

ゆっくりと日が暮れてきました。こんな詩のような毎日が、ずっと続くはずがありません。

私は今、一人です。

この中にはたくさんの人の連絡先が入っているはずなのに、誰の名前も思い出せずにいます。

実際、私と会ったところで、あなたは私のことを思い出せないでしょう。

それと同じで、私もあなたを思い出せずにいます。

カーテンは土色。絶対に光は差し込まない。

もしも勇気があるのなら、私はもう一度別の人生をやり直すでしょう。そしてその勇気とやらは、たぶんおそらく、私の中に眠っているのです。そして、たぶんおそらく、もうあと少しで、その勇気とやらを突き動かす火山のような衝動が私を襲うことでしょう。

小さな小さな箱の中。私は今、この中にいます。魂だけが浮遊して、どこかへ飛んでゆくのです。

あたし 「あたしの周りは敵だらけだ。あたしは…守ることが出来なかった。あたしは自分を守ることを選んだ。当時のあたしにとってそれは当然の選択だった。あれほど恐れていたのに、世間は誰もあたしを責めなかった。それどころかあたしを守ってくれた。復帰が出来るように環境を整えてくれた。あたしは、

泣く暇もなかった。実際、一滴の涙も出なかった。」

あたし 「それなのに…突然あたしの中の全てが空っぽになった。まるで水が引いていくかのように、綺麗さっぱり、何にもなくなった。」

蜘蛛 「あなたのせいじゃない。」

あたし 「そしてあたしは、音楽をやめた。音のない世界へ逃げた。とにかく毎日、何も変わらない、只繰り返しているだけの世の中をにらんだ。

音はすぐに無くなった。そもそも音なんて。この世に存在しなかったのではないかと思うくらい、あつという間に。

でも…文字はあたしを追いかけた。世の中を裏切った代償は大きいと、いつまでもあたしにつきまとった。

…だから、あたしは…文字で反論する道を選んだ。昔少々身に着けた音楽の知識をひけらかして、あることないこと書きなぐった。次々に平坦な文字は浮かんた。」

あたし 「あたしは…。」

蜘蛛 「時期がきただけだ。」

あたし 「…お別れの挨拶も出来なかった。」

蜘蛛 「絶対に会いに行くことは出来ない。」

あたし、小包を開ける

中には死亡届

あたし 「かこ。」

蜘蛛、席を立つ

あたし 「かこ。過去。あたしの過去。」

「もう何度言ったか分からない。…ごめんね。」

あたし 「…ごめんなさい…お願いです…許してください…三分かってる。絶対に許されない。それでもごめん、決して直接言えないけれど、ごめん。お願い、行かないで。あたしは、寂しい。一人じゃ、寂しい…ねえ、どうしてあたしなの。どうして、過去の。お願い、許して。ごめんね。ごめんね…。こつちを向いて。」

かこ、席をたって去ろうとする

あたし 「待って……」

かこ、立ち止まる

あたし 「お願い。一言だけ。…もしあたしにその権利があるのなら、答えを聴かせて。」

かこ、黙って席につき

最後の演奏を始める

演奏の中、あたしはかこのいるステージへとあがり

先ほどまで朗読者がいた三席にそれぞれ腰かける

最後に、かこによりそう

♪あたしからの返事♪

大好きって言えたらなあ

ありがとうって言えたらなあ

愛してるって言えたらなあ

もう会えないけれど、終わりじゃない。

もう終わりだけれど、またいつか、どこかで会える。

この世は分からないことだらけね。

薄気味悪くて笑っちゃう。

一緒に笑えたらいいのになあ。

一緒に泣けたらいいのになあ。

時が来たから出かけただけよ。

探してなんて頼んでいない。

でも、思い出してくれてありがとう。
この世の流れは単純で
全てが決まっているの。

だからあなたもその身をゆだねて
そっと生きていけばいいんだよ。

ああでも、やっぱり

大好きって言えたらなあ

ありがとうって言えたらなあ

愛してるって言えたらなあ

風よ運んであの子のもとへ

瞳を閉じて会いに行こう

曲が終わり、あたしとかこはゆっくりと交わる

あたしの表情は徐々に晴れやかとなる
全てが許されて全てが溶け出した

かこはゆっくりと姿を消す

あたしはかこの座っていた場所に座る

あたし 「ねえ、かこ。あなたは確かにここにいた。そして今、あたしは確かにここにいる。

あたしたち、また会える。必ずまた、どこかで会える。

あたしの身体も老いていく。そしていつかきつと、消えてなくなる。

この世からあたしの身体がなくなったとき、そこには何かが待っている。

ずっと忘れてた。あなたの身体が消えてなくなったとき、燃え尽きたあなたを見て、あたしは確信したんだ。そう、あたしたち、またすぐに会える。必ず会える。生きるも死ぬも関係ないんだ。

物事には終わりが来る。だけど終わりのその先には、いつか必ず再会が待っている。大好きだよ、あたしのかこ。また、会おうね。」

あたしを残したまま舞台はだんだんと暗くなる。
ゆっくりと暗転

発行元 せんすおぶわんだあ

発行日 2017年9月17日

ご利用について

作品の上演などについては、WEBサイトのコンタクトよりお問い合わせください。

著作権は せんすおぶわんだあ に帰属します。

*本書の内容は予告なしに改訂となる場合があります。

WEB サイト せんすおぶわんだあ

<https://www.sens-of-wonder.com>

Twitter

@Sens_of_wonder